

『タイ 国民国家形成期(1868-1932 年)における女子教育の展開』に関する研究

平成 17 年度入学

派遣先国：タイ

宮内 春菜

キーワード：タイ、タイの女性、女子教育、国家と女性、国民国家形成

対象とする問題の概要

国王ラーマ 5 世の治世(1868-1910 年)から立憲革命の起こった 1932 年までの期間は、絶対王政の下での国民国家形成努力がなされた。この過程で国王に忠誠を誓う国民の育成が目指されたが、この際国家が女性に求めたことは、家庭婦人として国民となること、即ち男性のように官僚や近代法の受け手としてではなく、家庭で男性を介して間接的に国民となることであった。この家庭婦人として国民たる女性像は国家の理想女性像と位置付けられ、国家は理想女性の育成を目指すことになるのだが、その重要な一手段とされたのが教育であった。国家による女子教育は 20 世紀初頭から本格的に開始された。当初、西洋列強の進出により主権維持を懸念した国家は、タイの相対的な発展性の指標とすることを目的に女子教育を開始させた。しかし次第に独立の危機が薄れ、国民の育成が国家の課題となっていくと、国民形成のツールとして教育の重要性が認識されていき、女子教育においては上記の理想女性の育成がその目的となっていくのである。

研究目的

現在、タイの女性に対して我々が抱くイメージの一つに、家庭外で活発に活動し社会的評価を得ているというものがある。実際、労働参加や教育機会等を指標にした女性の地位の国際的な相互比較で、タイは他の東南アジア諸国の上位に位置する。勿論、これは現代タイ女性の多様なあり方の一つに過ぎないのだが、少なくとも家庭婦人たることのみが是とされているわけではないといえる。その一方で過去に目を向けると、国家が女性に与えた唯一の選択肢は家庭婦人であった。この家庭婦人としての女性像をして、如何に現代のタイ女性像を説明することができるのか。本研究はこの問題提起に対する答えの基盤構築を目的とし、国家により理想女性像として家庭婦人が定義される背景とその過程を、それが明確に反映された女子教育の展開を切り口として紐解いていく。

フィールドワークから得られた知見について



チュラーロンコーン大学

今回は約 1 ヶ月間、タイ・バンコクに滞在してフィールドワークを行った。研究内容により、文献研究を中心とした。前回のフィールドワークでは、主に大学図書館で大学修士論文を含めての資料収集を行い、殆どの二次資料を収集することが出来た。しかし、二次資料のみでは情報の正確さに欠けるという点が否めず、そのため今回はタイ国立公文書館での一次資料収集を主目的としたフィールドワークとなった。公文書館での調査は、莫大な資料の中から取捨選択していくという作業に時間が取られ、また資料のコピーも、とくにマイクロフィルムからのコピーは週単位での時間を要した。今回

は初めて公文書館で一次資料を収集するということから、あまり多くの資料には目を向けず、研究に関連性の強いものから優先的に収集するよう努めた。一次資料からは二次資料からは得られない情報を多く得ることが出来、研究を深化させるためには必要であることを実感した。

今後の展開・反省

今後は、今回収集した一次資料の内容をこれまでの研究と照らし合わせ、必要に応じて添付していくことによって研究内容により明確さを加えていきたい。今回の反省点は、資料収集の際に時間的余裕を持つべきだったことである。まず、公文書館での長期調査には事前に許可書が必要であるが、この発行までには約2ヶ月以上を要した。また、公文書館での資料収集は図書館での収集作業に比べて格段に多くの時間を要したため、限られた時間の中で効率的に収集するよう務めるべきであった。



ラーチニー校の授業風景